様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：１３１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２５１１

研究課題名（和文）近代漢語のﾞｫｲｽを表す構文に相互作用する述語動詞の複合構造の変性に関する研究

研究課題名（英文）The study of a link between the establishment of Voice Structure in Modern Chinese and the Changes in Complex Verb Structure

研究代表者
藤田　益子（Fuijita, Itsuko）

新潟大学・教育・学生支援機構・准教授

研究者番号：１０２８４６２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：ヴォイスを表す中核的構文は“把”・受動・使役構文を対象とする。これらは動詞の文法化により機能構文を確立する過程で、主体と対象=受動関係、動作と結果＝因果関係を分化する必要性が生じた。元来古漢語の動詞は自動・他動の区別が不明瞭で動作主体との関係が直接的なものは他動、間接的なものは使役と文脈に頼っていたが、次第に自動的な用法に固定され他動の機能は使成複合動詞として表現されるようになった。この複合化は動作の原因・授受の表現を可能にし、意味の重心の後傾を伴って、ヴォイスを表す構文の構築に対し相互進展を助長した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
１.近代以降の白話資料の機能構文の内部構造を時代毎に対照し、動詞複合構造の発展とヴォイス構文の通時的な助長関係を示した。２.使成複合動詞等の初期形式や補語の起源などを系統的に調査し、古漢語の変遷過程を前提に、近現代の動詞の複合構造の推移を研究した。３.機能構文と動詞の複合化の連鎖に関し近代以降の変遷を解明し、機能構文を複雑化する要因が述語動詞の複合化であることを立証する。４.機能構文と動詞の複合構造の相乗波及効果の要因に対し言及し、ヴォイス構文の成分と機能義、述語動詞の複合構成要素の各関係を解析した。

研究成果の概要（英文）： In the process of the establishment of grammaticalization in Modern Chinese, some verbs have transformed into a Voice structure such as Ba structure, Passive structure and Causative structure. This transformation has been encouraged by the change of the predicate verb structure.
In this article, I showed some evidential phenomena of this process of the change and proved it diachronically.
Based on the relation between subject noun and object noun (or action-taker and action-receiver), I particularly focused on analyzing complex structured predicate verbs morphologically and semantically including ones appearing in Voice structure.

研究分野：中国語

キーワード：ヴォイス　受動構文　賓語　動詞　近代漢語

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

前段階の近代漢語の語彙の変遷研究においては、外的な要因を受けにくく文法構造に大きな影響を与え続ける動詞の中でも、実質的動作行為の意味が希薄になり文法的な機能を帯びるものを中心に研究を進めていた。これにより①介詞という新たな品詞が生じる②“把”構文や使役・受動の機能構文を構成する③動作量を表す補語の概念から重畳形式に発展する等の現象が発生する。そしてこれらの作用からa.形態変化の乏しい漢語の文構造に変化を与え構文を複雑化する b.使役受動の両機能のヴォイスを有する構文が出現する c.補語が発達するなどの傾向を把握した。ただし、通時的研究からこれらの事象が個別に起こるものではなく、相互進展の助長関係は深く結びついているのではないかと想定し、その相互の関連性に着目した新たな検証を行うこととした。

２．研究の目的

近代漢語のヴォイスを表す中核的構文の確立に相互作用する述語動詞の複合構造に対し、名詞成分(主語・賓語)の受動関係と動詞の自動・他動という観点からその関連性と変性を明らかにする。

３．研究の方法

語法化に伴い漢語のヴォイスを表すマーカーの中核的存在となり得た“把”構文、受動・使役構文が機能的構文構造を確立する過程で、相互発展を助長する要因となった述語動詞の複合構造の変性に関して形態と意義の両面から解析をし、通時的変遷研究を行った。具体的な手順と方法については、下記の研究成果に研究段階ごとに記した。

４．研究成果

第一段階では「“把”構文の処置義を構成する述語動詞の複合構造」について、動詞の複合化の進展と処置義を表す機能構文の発展との相互関係の考察を行うことを目的とした。

分析に際しては、動詞の複合化の形態に関わる名詞成分として想定可能なものとして、主語や賓語の文における語義上の役割という以下の三つの観点からアプローチを進めた。(1)施事、(2)受事、(3)施事でも受事でもないもの。

同時に、述語動詞の複合形態については語に分解して考えた。なぜなら、複合構造の述語動詞の成分はすべてが文中の同じ名詞成分との受動関係が一致しているとは限らない。つまり①V1の動作行為に係る名詞成分との受動関係、②V2の動作行為に係る名詞成分との受動関係、③V3の動作行為に係る要素との受動関係について、個々に考える必要性があるからである。

手順と方法については、動詞の複合化の進展と処置義を表す機能構文の発展との相互関係についてデータの収集を行い、上記の観点に基づき分析を進めた。その際、意味の重心の後傾にも注意を払った。

そして、これらの研究を進める過程で、新たに「語義指向」に基づく分析が必要であるという考えに至った。そこで、ヴォイスを表す構文に深く関わる動補構造における語義の指向性についても、近代から現代にかけての漢語資料に基づき研究を進めた。補語の種類と用例数は膨大であることから、まず、近代漢語において急速に発展を遂げた様態補語構文の述語成分において、動詞と補語成分がそれぞれ異なる他の文成分へ意味的方向性を示すことを明らかにし、形態と意味の両面から、その特徴を検証した。

第二段階として「“把”構文の致使義を構成する述語動詞の複合構造」について、動詞の複

合化の進展と致使義を表す機能構文への発展との相互関係について考察を行った。

手順と方法については、第一段階からの発展的研究であることから、従来の方法を踏襲し研究を進めた。

“把”構文は元来、処置義を中心発展してきたが、時代が下るにつれ致使義の構文に急速な増加傾向が見られる。動作の結果の生じるプロセスに注目して機能義を捉え、この二つの相違の分岐点がどこにあるのかを明らかにした。同時にS+“把”+N+Vp(V、VC、VN、V得C)という基本構文において、NとVp の関係によって“把”構文の表す機能義に違いが生じることから、この分化に述語動詞の複合化、補語の発達が大きく影響しているものと捉え、新たに研究段階で相互関係が明らかになると考え至った補語の語義指向という観点からアプローチも加え考察を行った。その研究成果については、国際学会において発表を行った。

第三段階として「動詞の複合化の進展と受動・使役構文の発展との相互関係」について考察を進めることとを目的として、主にヴォイスを表す機能として、受動と使役、二つの構文について研究を行った。

手順と方法としては、①使成複合動詞、結果複合動詞等の早期の用例から収集し、意味の重心の移行現象と語義の指向性（意味的指示性）及び、それらの機能構文への影響について検証を行った。②近代漢語において受動、若しくは使役を表す機能を持つものとしては、“被”、“叫”、“讓”、“使”、“蒙”の構文が挙げられるが、これらの機能を持つ語と、それに係る動詞の複合化の進展との関連性を考察した。特に、“被”構文の資料は戦国末期を起点とするが、唐代の口語資料において、既に優勢な受動式となっていたことから、近代漢語の観点に基づいて主に唐代の口語資料を使用した。

また、これらの機能をもつ語の用例を通時的に対照し、その趨勢を明らかにした。ただし、其々の盛衰の原因については、相互作用に拠るもの以外に、その他の要因の可能性も想定されるため、更に研究を進める余地が残されている。

第四段階として、これまでの調査結果を踏まえて、ヴォイス構文の中でも構造上の変化が最も大きくみられた“被”構文を中心に据え、構造、各文成分に係る問題、及び特殊な機能を帯びる構文に対して総体的な考察を進め、総括的研究を行った。

構文全体の変化については、文成分の多様化、構文の複合化に帰納し二分して捉えることが出来、特に“被”構文の構造にみられる変化としては、更に、移行、減少、発生、複雑化、消滅に分類された。

基本構造としては唐代には出揃いつつあるものの、歴史的変遷傾向として使用頻度がプラス傾向にあったのは、構造を「(S)+“被”+Np1+Vp+（Np2)」と考えた場合の“被”の後の意味上の動作主Np1 の無から有への移行、“被”構文の動詞の後の補語と賓語Np2 を含む構造の多様化、“被”と“把”の共起などであり、反対に、マイナスの傾向が見られたのは、“零被句”、“被”の後の動詞が裸の単独である形、文言的な構造などを挙げることが出来る。文言的な構造の具体例としては、「(S)+“被”+Np+“所”/“之”+V」、「(S)+“被”+“不”+V」構造のほか、「S+“為”+Np+“被”+V」、「“S+“被”+Np+“見”+V」、「S+“交被”+Np+V+C」構造などがある。

また、特殊構文としては、二つの賓語を持つ構文の中に特定の意味機能を持たせるものがあることを確認した。

最終的に、整理される問題は次のようにまとめられる。

・“被”構文における変化としては、構成成分の変性がある。

具体的には、１.述語動詞の前後、特に後置成分、2．賓語、特に動作行為の受け手となる二つ

めの賓語成分、これらを含む構文の複雑化と増加が大きな傾向として挙げられる。1.については、動詞の虚化や補語の発展という述語に係る変化で、特に補語の用法の多様化は“被”構文の構造の複雑化に多大な影響を与えている。

2.の賓語となる名詞成分Np2 の増加は、もともとNp2 として代詞“之”などを置く用法はあったものの、それとは別に、1.の述部の変化と共に相乗的に発展したものと考えられる。受動義を示すヴォイス構文において、動詞の虚化や補語の発展によって更に複雑な受動表現が可能となり、同時に、誰が、ある動作行為について、何に、何処へ、何としたかなど、それに追随する名詞成分も多様化する必要に迫られ、結果的に“被”構文におけるNp2 の性質が変化するに至ったとみられる。

“被”構文の賓語Np2 の性質については、清末の口語資料『児女英雄伝』等において賓語Np2 が現れる“被”構文である「(Ｓ)+“被”+Np1+Vp+Np2 構文」及び『“把”と共起する構文」における賓語Np2 は、他の文成分との関係から性質を次のように整理することが出来る。

(1)動詞Ｖと賓語Np2 の関係性

(Ｓ)+“被”+Np1+Vp+Np2 構文におけるNp2 は、“零被句”を除き基本的には述語動詞と動賓という支配関係があり、この動賓関係は賓語の種類によって三種類に分けられる。

＜達成の賓語Np2＞

①動作行為が及び至る到達点(場所賓語)

②動作行為が及び生じた結果(結果賓語)

＜受動の賓語Np2＞

③動作行為が及ぶ受け手(受事賓語)

(2)主語Ｓと賓語Np2 の関係性

上記③でいう受事賓語とは、Np2 が直接的な動作行為Ｖの受け手となるものであるが、ここには主語Ｓ(意味上の受動者)と賓語Np2 の間に包含関係の有無が存在する。包含関係がある場合、Np2 を包含している主語Ｓは、動作行為Ｖによって生じた被害や損失を事柄として全面的に被る。この包含の関係性と表現方法から、更に次の三種類に分けることが出来る。

＜Np2∈Ｓ＞Np2 はＳの要素

①領属関係：Np2 がＳの一部分を指す。

＜Np2＝Ｓ＞Np2 はＳに一致

②複指関係：異なる語で同じものを指す。(Np2 が代詞の場合も含む)

③同一関係：同じ語で同じものを指す。

なお、受事賓語の中でも包含関係がないものに対しては、そのまま受事賓語と称する。

(3)零被句R1

＜Ｓ＝∅、Np2⇒S＞主語Ｓが無いため賓語Np2 との関係は存在せず、動詞Ｖと賓語Np2 の支配関係もない。動詞Ｖや賓語Np2 に対応する主語Ｓがなく、賓語Np2 が動詞Ｖの動作主である。それゆえ、Np2 は構造上の賓語であるが、述語に対する意味上の主語（動作主）と言える。

・“被”構文の賓語Np2 の機能性については、拡大の方向にある。

“被”構文が動詞の後に更に賓語を取るのは、既に南北朝に見られるが極めて少なく、統計上、六朝以前は１％にも満たず、唐宋で 17%、元明清で 17%を占めるというデータもある。特に近代以降、発展傾向にあるNp2 は、「場所賓語、結果賓語」で、これは、“被”構文の賓語Np2 が、受事賓語、つまり受動としての単なる動作の受け手としてだけでなく、場所や結果という動作の到達（達成）状況を示す機能へと質量共に発展したということが出来る。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　2　件）

１．藤田益子,近代漢語の受動構文にみる変性―『児女英雄伝』の受動構文を基軸として－,『新潟大学言語文化研究』,査読無,第 23 号,2019 年,27-69 頁

２．藤田益子,日本語と中国語における授受表現の相対的内包と外延の俯瞰的考察,『国際ｾﾝﾀｰ紀要』,査読無,第 11 号,2015 年,1-40 頁,

〔学会発表〕（計　2　件）

１．藤田益子,『児女英雄伝』的“Ｖ得Ｃｚ”,第 17 届全国近代漢語学術検討会及閩南語演変国際学術検討会，査読有,単独発表,2016 年

２．藤田益子,「『兒女英雄傳』における様態補語構文の構造と語義指向について」,新潟大学東アジア学会,単独発表,2015 年

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。